

代の書が集的に和刻された江戸前期の刊行だった。また江戸中期に刊行された六書は当時から珍本・孤本としての価値が認められて和刻された可能性が考えられた。

(五) 二〇六部中の江戸写本九一部では、江戸医学館本が七九部に及ぶ。うち多紀氏の手跋本と自筆本は元堅一〇部、元簡五部、元胤四部、元昕二部だった。また江戸医学館本の江戸写本中、刊本からの転写では一五部が紅葉山本、一一部が毛利本に基づくと認められた。彼らが貴重書を研究利用する目的で写本を作製したため、二〇六部のうち江戸写本のみが宋・清の各時代にわたっていると考えられた。

(六) 二〇六部のうち明代に著された書が一四九部、また明版が八六部と高率なのは、

江戸時代の蒐書ゆえ、時代が重なる明清代に著された書や明版・清版が当然多く、しかも幕府機関が蒐集・保管したのでほぼ全体が内閣文庫に伝承された。中国ではとりわけ医書について江戸医学館に相当する政府機関がなかったため、後世に評価や復刻がなされなかった医書、とくに明代までの書が佚書となったが、清代の書は数多く伝承されていた。この双方の事情により、内閣文庫に伝承された中国佚書の大多数が明代の書、ないし明版の比率が高いと理解された。

(七) 内閣文庫の中国散佚古医籍二〇六部・二五〇書目は、重複を除く少なからぬ書が世界に一点しか存在が知られていない孤本である。それらの貴重性は歴史的にも高く評価されねばならない。またほぼすべてが江戸幕府機関の旧蔵書で、

さらに江戸医学館の旧蔵書が過半を占める。その蒐集と保存に努めた多紀元簡・元胤・元堅らの功績はきわめて大きい。

(平成九年五月例会)

血液循環論前史(2)

藤倉 一郎

先に報告したイブン・ナフィスについての論文が発表されるまで、ハーベイ以前の血液循環理論はセルベートスを嚆矢とすると考えられていた。

セルベートスの個人史

セルベートスは一五〇九年、スペイン、アラゴン州、ヴィラノヴァに生まれた。十三歳でサラゴツサの大学に入学し、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を学んだ。のちに法律を学ぶためにツールズの大学に入学した。十五・十六歳で法律よりも神学に興味をむいていった。そのほか彼はエラスムスの影響をうけ、歴史、地理にも興味をもっていた。

ツールズの大学生活を中止すると、かれはカール五世の懺悔僧クインタナの秘書に招かれた。

一五二九年カール五世の戴冠式にポロニヤまでいき、法王に会った。法王が群衆の上に高く座している光景をみて憤慨した。この頃は免罪符が盛んに売買されていた。彼はキリスト教的背景を有する正直な自由思想家であった。ローマ教

徒でもないし、新教徒でもなかった。二十一、二歳の一介の青年であり、づづしくも宗教改革者として自己独特の道を歩き出した。

三位一体の誤謬

一五三一年二才の七月、『三位一体の誤謬』を出版して、神とキリストと精霊とは、神の三つの傾向であつて、三つの人格ではないことを主張したのである。

しかし、彼の予期に反して、全ての宗教改革家の反対をうけ、彼はスイスにとどまることが出来ず『三位一体論問答』なる一書をあらわし、パリに出た。

パリ医学修行時代

一五三二年パリでヴィルヌーヴという匿名で、大学にはいり、数学、物理学をまなんだ。彼は既にフランスにおいても異端者であつた。カルヴィンと神学上の議論をしようとしたが、果たさなかつた。印刷所の閲読、校正係をして生活を維持していた。さらにリヨンに移り、トレキゼル兄弟のところへ校正係をした。

一五三五年二六才のとき、トレミーの地理書を改訂出版した。コロンブスのアメリカ大陸発見以来、世人の興味が、世界地図に向けられている時期だったので、読書界では好評であつた。これで得た金をもとで、一五三六年再びパリにて、医学を修めた。このころ血液循環理論も考えだしたと思われる。パリでは地理学、占星術の教授として大学で教鞭をとつたが、大学の同僚を愚鈍とののしつたために、大学を追

われた。『占星術の弁明』はパリ時代の出版である。パリを離れリヨン近くのシャールリユー市で医業をはじめた。一五四〇年ドーフィニー州ヴィアンヌ市に移つた。ヴィアンヌ市の大僧正ポーミーエはセルベートスがパリ大学で地理学を教えていた時の生徒の一人であつた。大僧正ポーミーエの直接の庇護のもとに彼をおいたのである。

一五四六年から一五四八年まで、友人フレロンを介してカルヴィンと文通をしている。カルヴィンは『キリスト教綱要』を送つて、セルベートスの質問の答えにしようとしたが、セルベートスはこの本の行間に無遠慮に批判を書き込んで送り返した。

キリスト教復興論の出版

一五五三年一月セルベートスはヴィアンヌ市アルタレー書店より『キリスト教復興論』を出版した。セルベートスの自費出版で、著者も出版社も秘密であつた。

「キリストは先在せず、誕生より神の子であつて、永遠より神ではない。神は単一にして不可分でこれを三位に分かつことはできない。三位というのは単に神の表頭の差異であつて、本質の差異ではない。精霊も一つの形而上的実在者にあらずして神の座であり、父および子よりいずるものである」。以上のように主張している。そしてこの中に肺循環理論が整然と論述されているのである。

一五五三年二月ヴィアンヌの異端糾問官オリーにセルベートスのこの『キリスト教の復興論』のことが耳にはいり、セ

ルベートルスは家宅捜査をうけた。

セルベートルスの逮捕、そして火刑

一五五三年四月アルネレーと同時に捕縛された。彼は脱獄して逃亡したが、オリイは不在判決により火刑を宣告された。約三か月フランスに潜伏し、ジュノヴァにきて一月ほど滞在して、日曜日教会のミサに出掛けた。その時カルヴィンの発見するところとなり、八月十三日逮捕された。八月十五日から、審問は開始され、一〇月二十七日シャンベルの丘で火刑により処刑された。

その時の判決文は次のように記録している。「セルベートルスよ、われらは汝を捕らえシャンベルに送り、木にしぼりて生きながら火刑に処し、これを灰塵にきせしむべきことを判決す。その筆写および印刷する著書もともにこれを焼き捨てる。かくして汝は汝の如き罪を犯さんとするものを見せしめとして汝の生をおわるべし。われら執行官をして、この判決を執行せしむ」

セルベートルスの血液肺循環理論

キリスト教の復興論の中の肺循環理論の一部をここに掲げる。「しかしながら、皆が信じているように、この純化された血の流れは心臓の中壁を通るのではない。そうではなくて、非常に巧妙な装置によつて、この純化された血は肺を通る長い経路を経て伝えられるのである。それは肺によつて精製され赤黄色になり、肺動脈から肺静脈に流れ込むのである。かくしてそれは肺静脈の中で吸い込んだ空気と混合し、息を吐

き出すことによつてその煤けた蒸気から浄化される。こうして「生命の霊」は、この混合によつて適切につくり整えられて、左心室の膨張によつてそこに吸い込まれる。かくのごとく、肺によつて連絡と精製が行われるということは、肺の中の肺動脈と肺静脈との様々の連結連絡が示している。これは肺動脈がひどく大きいことでもわかる。すなわち、たんに養分補給のためだけならば、この様なそしてこんな太さの必要はないし、心臓から肺へかくも多量の純粋な血を放出する必要もないのである」

考案

このように肺循環にかんしては、右心室↓肺動脈↓肺静脈↓左心房という正しい回路を想定し、更に空気によつて血液が浄化されるという考え方が成立していたのは、セルベートルスのパリ時代の医学の学習、とりわけ解剖学の学習にさいして得られた知識が大きく影響していると考えられる。彼が神学においても地理学においてもユニークな発想をみたように、この天才は意外と安易に肺循環理論を構築したのではないだろうか。

参考文献

1. 藤倉一郎 血液循環理論前史 日本医事新報、No.三七八六、
平八、一一、一六
2. 黒崎幸吉著作集(6) カルヴィン研究、セルベートルの生
涯 新教出版社、東京、一九七三
3. 中村賢二郎、倉塚平編訳 原典宗教改革史 P.三五〇

カルダン社、東京、一九七六

4. 印具徹、益田健次ほか 論文集、宗教改革研究 P. 一五

三 新教出版社、東京、一九六八

5. Charles D. Onalley Michael Servetos, American Philosophical Society: Philadelphia, 1953

6. Owsei Temkin Was Servetos influenced by Ibn-An-Nafis? Bull. Hist. Med. 8: 731-734, 1940
(平成九年五月例会)

アラブ医学者の名前

泉 彪之助

演者は、中世のユダヤ人哲学者・医学者モーゼス・マイモニデスの生涯を調査している間に、多くのアラブ医学者の名前に接した。その成り立ちと表記について考えていたところ、ビュステンフェルトのアラブ医学・科学史の序文に、アラブ医学者の名前の詳しい解説があることを知った。とくに興味深かったのは、イブン・ズフル・アベンズアル、イブン・スリーナ・アビケンナというようなラテン名の起こりが、アラビア語を表記するのにヘブライ文字を用いたスペイン・ユダヤ人の言語慣習から来たという指摘であった。このことを中心にアラブ医学者の名前について考えて見たい。演者の知識はまだまだ未熟で、ここにのべるのは一種の試論と理解していただきたい。

アラブ医学者の名前を記載する場合の問題点は、(1)アラブ名を用いるかラテン名か、(2)アラブ名ならば、イブン・スリーナのような簡単な表記かフルネームか、(3)フルネームならどの文献によるか、(4)アラブ医学者の名前はどんな構成か、(5)日本語表記はどのようにするか、などである。これらの問題のうち、ラテン名を持つアラブ医学者は数が限られ、また簡単な表記では混同が起こるので、アラブ名のフルネームとラテン名の併記が必要であった。信頼できる新しい英文文献を入手できず、一八四〇年初刊のビュステンフェルトの古典を根拠としたため、ローマ字表記が現在のものと一部異なっている。

アラビア語およびヘブライ語は、アラビア語のアリフを除きほとんどの文字が子音を示し、母音は発音符号で示されるので、読解が困難でローマ字表記も多様となる。とくにアラビア語は、語形や発音に変化を起こすことが多い。

ビュステンフェルトによれば、アラブ医学者の名前は次のような構成から成る。

(1) 息子の名前(の父) (abu)、(2) 本人の名前、(3) 父の名前(の息子) (ibn or ben)、(4) 祖父または先祖の名前 (ibn or ben)、(5) 付加名(多く al)

(ビュステンフェルトは、名前の途中では ben (ibn の省略形)、名前の最初では ibn としている。ただし現在のアラブ人は、ibn という言葉は普通使わない)

このうち、息子の名前とされるのは、必ずしも実際の息子の名でなく比喩的な名の場合もある。父あるいは祖父の代わ